

■BF連盟戦記6 ティファ編—体験版

——バトルファック！ それは男女が互いのプライドを懸けて性の技を繰り広げ合う競技である！

そして『BF連盟』はバトルファックを普及するため日夜ハッスルする組織である！ 今日連盟の普及活動として、新たな犠牲者が招かれた！

今回の犠牲者はティファ・ロックハート。

不意打ちで襲って拉致し、連盟のリングに監禁することで淫闘を強制していた！ 目的は淫闘の普及！ そして彼女が犯した重大な過ちの断罪である！

「いきなりこんなことに連れてきて、バトルファックしろだなんて……なんなのよあなたたちは！」

『そんな態度とっていいのか？ 自分の胸に手を当てて罪を思い出してみろ！』

（……！ まさか、アバランチのことが知られ……）

『今回のゲストの罪……それは、その見た目です少男をかどわかした罪だ！』

「何よそれっ！」

ティファには自覚がないようだが……これは連盟の言い分にも一理あると言わざるを得ない！

あの身体、あの服装であの戦い方……当時の性少年の急所にどれだけクリティカルヒットを叩き出したことか。

被害は相当なものであり、今回はそれに対する断罪の試合なのである！

ティファからすれば呆れるような理由でも、

リング周辺の観客席に集まった男たちはうんうんと頷き、納得している。

この状況から逃げ出すことは困難だろう。ティファは渋々だが、淫闘することを受け入れた。

（……この人たちがどこで見てたのか知らないけど……やっぱりこの格好、男の人の目を引いちゃうのね。今だって、すごい見てるし……）

『何でパンツ見られるの嫌なのに際どいミニスカなのか？！ これはもうドスケベ確定！ BFも止む無し！』

「だ、黙りなさい！」

露わになった太股が視姦されていると気づき、思わずスカートを押さえる。

こんな場所からすぐ出るためにも、早く淫闘とやらを終わらせなければ。
呼吸を整えて赤くなった顔を戻し、手続きを済ませて試合に臨む。

『さあ観客……大勢のファンが見守る中、リングイン！ ……あれ、ティファ選手、特性コスチュームは……』

「あんなの着るわけないでしょ！」

記念すべきデビュー戦。現れたのはいつも通り、白シャツでへそ出し、サスペンダー、黒のミニスカートという姿。

淫闘の仕様上、グローブは外しているが……連盟が用意したはずの淫闘用リングコスチュームをティファが着ていないため、司会をはじめ一部ギャラリーから不満の声が上がる。

【やっぱりパンツ見せたいんじゃないか！】

「何でそうなるのよ……！」

リングコスチュームはパンチラこそ防げるものの、ビキニ水着型で露出度が高いものだった。下着が見られるのも嫌だが、こんな場所で肌を見せるのも強い抵抗がある。その上で連盟が用意したものとあれば、何が仕込まれているか分からない。というわけで衣装はそのままのものを着続ける。

観客からの野次が飛ぶが、もちろんパンチラを見せたいなどという意識は一切ない。

【まあこっちとしては、その服も大歓迎だけだね】

一方、ティファの衣装を否定しないのは対戦相手の小柄な少年。
彼が普段衣装のままでもOKとしたため、ティファの希望が通ること。
代わりとして、少年のあどけない童顔に似つかしくない視線が浴びせられるが。

「……何よ……ジロジロ見ないでくれる？」

【あー、ごめんって。でもこの程度で恥ずかしがってたら本番で神経持たないよ？ ほらファンがめっちゃ見てる】

見るのは観客たちも同様。リングコスチュームでないことに不満を漏らしつつ、目はティファを視姦し続けている。

比較的広い観客席が満員で埋まっていることや歓声の大きさから、いかにギャラリーが多いかが窺い知れる。

(何がファンよ。人を性的な目で見て……！)

あからさまな視線に、性的な感情を向けられているのだと……自分が魅力ある牝なのだと意識させられる。

若く貞操観念も強いティファだが、経験がないわけでもない。

ヒトとしての発情期にある今、嫌でも突き刺さる獣欲の内容まで想像してしまう。

(変な気分になる前に、とっとと終わらせなきゃ……！)

◆BF連盟のバトルファックルール

対戦形式……

『エンドレス』制限時間なし、精力が尽きるor失神でKOされる、もしくは降参で決着がつくまでの真剣勝負。

◆基本ルール……

BF連盟のリング上、男女それぞれ一人ずつによる一対一の対戦。

絶頂や精力が残っているかはリングや会場の快感センサーや審判の判断で判定される。ただし選手の状態によっては続行可能の確認や意思表示が必要。

意思表示には言葉での自己申告の他、自ら行為し続ける、勃起を見せる、ファイティングポーズやピースサインを見せる、などでOK。

リング・会場は連盟が結界を施しており、近寄ると攻撃系の能力が制限・封印される。ただし試合で勝利することで解除可能。

◆敗北条件……

精力が尽きる、ダウンから10カウント、失神、降参、ルール違反など。

他、審判が続行不能と判断した場合。

ただし試合を盛り上げるため、挿入や膣内射精、KOが間近、などのタイミングでの降参は無効と判定されることがある。

また、ダウンしても追撃が行われた場合は基本的に10カウントしない。

一度絶頂しても精力が残っていれば続行可能。

◆禁止行為……

凶器・ドーピングの使用。ただし淫気など、性感攻撃のみが目的の魔力や淫具の使用に関しては有効とする。

性交、快感を与える目的やそれに類するもの以外の攻撃的行動。

なお、妊娠をはじめとする、試合中に発生したいかなる事態・被害について、連盟は一切の責任を追わない。

——……

『ルール確認が終了！ さあ両者準備はいいか？』

少年と向き合うティファ。淫闘という行為は初めてだが、ティファは内心、勝利を予感していた。

(こういう小さい子って、割とシンプルなのに弱いよね……今も私の胸見てるし。うん、多分……いける……！)

純な性格のティファだが、こう見えて娼館で働いた経験を持つ。その際の評価は非常に高く、性戯にはそれなりに自信があった。また、少年のように年齢の低い小さな子も相手したことがある。ティファの経験上、彼らは貪欲で悪戯な反面、シンプルな行為に弱い傾向にあった。今も頭と比較できるサイズの爆乳をちらちら視姦しており、これを利用すれば絶頂させるのは容易そうだ。

頭の中でシミュレーションを済ませ、勝利を確信してゴングを待つ。

(すぐ捕まえて、胸でしてあげれば……どうせ簡単に終わるでしょ♪)

『では運命のデビュー戦、開始——！』

(見てなさい、すぐに終わらせ……)

ぼろんっ♥

「え……っ？」

『おっと開始早々に見せ槍パフォーマンス！』

ここは歴戦の絶倫として、淫闘初心者のティファに先手を許すということか?!』

【淫闘初めてだよな？ サービスしたげるよ、ほらっ♪】

ゴングが鳴り、男たちへの嫌悪感から速攻を決めようと考えていたティファ。だが、少年がパフォーマンスでショーツを脱ぎ捨て……露わになった彼の一物を見て、激しい動揺に襲われる。

太いだけでなく、力強く反り返って脈打つ巨根は、まさに淫闘のために鍛えた、女に勝つためのもの。

今までティファが見てきたものの中には、同じように太いものや見るからに硬そうなものはあったが、少年のものはそれらの要素全てを詰め込んだかのようなようであった。

また、匂いも強く、嗅覚から本能を刺激してくる。

こんな強烈な存在感を持つものを目の当たりにして、緊張と興奮でどうしても身体にブレーキがかかってしまう。

(何……あれ……どうなってるの？)

大きいのも硬そうなもの見たことあるけど、こんなの初めて……っ！

こ、こっちまで、匂いが……！)

『情報によればティファは「蜜蜂の館」という娼館で大活躍していたという噂！

性戯に期待がかかっている！……が、しかしティファ、赤くなって動かない！

緊張しているのか？』

男好みのする外見や娼館での経歴を持つティファだが、男への免疫は経験量ほどではない。それだけ純情ということであり、恥じらいと貞操観念を保ち続けているということなのだが

……

一般社会の女性としては良き要素でも、この場では裏目に出ていた。

【あれ、責めないの？ 悪いけど睨み合いは嫌いなんだよねー……！】

「あ……っ！」

『待てなくなったか、ティファに組み付く！

が、簡単には触らせない、逆にティファが掴んだ！』

強者の自覚と余裕で誘っていた少年だが、ティファの硬直はティファ自身が思うよりも長く、痺れを切らして攻めに転じてきた。

有利なポジションを取ろうと接近する少年。ティファも我に返り、彼に触れさせまいと反射的に手首を掴む。

(いけない！ ポーツとしてた……こんな子に、易々触らせたりしないわよ！)

【お、流石に反射力は高いか……！ でも意外にチンポ慣れしてないね？

緊張してるのバレバレだよ？】

「ちん……っ?! そ、そんなことないわよ！

ちょっと、近付けないで……し、してあげる、から……っ！」

『反応する形で動いたティファ！ デビュー戦とはいえ表情はぎこちないまま！

自分のペースに持っていけるかが鍵となるか！』

体力、体捌きではティファが勝るが、連盟リングの結界で腕力が制限されているため、少年を完全に押しやることができない。

そこで少年が腰を突き出し、また巨根を強調。

長い肉塊は迫力もあって簡単に届きそうで、更に少年の直接的な言葉を聞いて思わず赤くなってしまう。

この「性への抵抗感」も淫闘では利用できるはずだが、ティファにとっては緊張と動揺の燃料でしかない。

【してくれるの？ なら早くやってよ、責めなきゃ勝てないよ？】

（わかってる、けど……！）

『おっとここで撮影班が暴走！ ローアングルで純白パンツが映し出されてしまう——！』

「きゃっ?! ど、どこ撮ってるのよお！」

更にリングの外からも間接的な攻撃。

試合の様子は撮影されているが、近くのカメラが不自然に角度をつけてティファのスカートの中を捉えていた。

しっかり会場上部の巨大スクリーンに映され、羞恥心で咄嗟に脚を閉じようとしたところ、その隙に付け入られる。

「あっ……！」

『羞恥に悶えたように見えたティファだが、ここで押し倒した！ やっと攻防に入るか？』

隙を突いた少年はティファを押し出すのではなく、自ら引いてティファに押し倒された形に持ち込んだ。

彼としてはどうしてもティファに責めさせたいらしい。

それは試合を盛り上げるため、そして責められても逆転できるという圧倒的な余裕があるため。

見下された態度に屈辱を覚えつつ、ティファは好機を逃がさず肉棒に触れる。

【ほら早く、ここで決めるつもりで責めてよね♪】

「っ……！ いいわ、とっとと終わらせてあげる……！」

『上に乗るようにしてペニスを持った！ 胸を見せながらゆっくりと扱き立てる！』

小声で煽る少年の太股に胸を乗せ、量感を強調させて握る。

格闘家とは思えない綺麗な指を這わせ、ゆっくりと扱く。

小手調べとはいえ直接性器を刺激してダメージを与えている……はずだが、ティファの方も巨根の熱を直に感じ、責めているはずなのに心拍数が上がっていく。

「ど……どう？ 出しくなったら、いつでも出していいのよ……？」

【気遣わずに本気で責めていいよ♪

ていうか顔真っ赤だよ、チンポ触って興奮してる？】

「そ、そんなことないわ！ そっちこそ、黙って気持ち良くなってなさい……！」

『胸で下半身にのしかかっただのおっぱいマウント、そこから手コキ攻撃！

しかしこれには余裕の表情！ ティファは責めを続けるのか、それとも切り替えるのか？』

有利なポジションのはずなのに、心理的なイニシアチブは完全に少年側。

始まったばかりとはいえ、圧力や速度に緩急をつけた愛撫でもダメージはほぼ確認できず、焦ったティファは握りを外して次の責めに移る。

【こんなんじゃまだまだ出しくならないな～♪】

「立派な割りに、遅漏なんじゃないの……？ なら、こっちでしてあげるわ！」

正面に向き直り、肉竿を摘まみ上げて上を向けさせ、胸の谷間へ迎え入れる。

爆乳のはち切れんばかりの弾力と柔らかいシャツを肉棒が割り進み……すっぽりと完全に包まれる。

絶倫巨根が根元から先まで呑み込まれ、少年の表情が少し強張り、周囲からは爆乳のボリュームに歓声が沸き上がった。

『次はパイズリか？ ペニスが引き込まれていく！ あの巨根が完全に埋まった——！

圧倒的サイズにギャラリーも大興奮——！』

【っは、見た目より、でか……っ！】

ずむっ♥ むちい……っ♥

「ふふ……♪ 無理なくていいわよ？

出したい時に言ってくれたら、思い切り搾ってあげるから……っ♪」

前から見るだけでは想像しにくい乳肉の奥行き。谷間に埋まることで実感し、少年が呻き声を漏らす。

ティファの乳房は見た目以上にボリュームミーで、娼館で相手した男たちは皆一様に似た反応をしていった。

そして同じく、全員がこの刺激に耐え切れずに達していった。

今回も手応えを感じ、勝利が近いと思うティファだが……

『想像以上に圧力があるか、呻き声が聞こえた！ 横から見るとそのサイズがよくわかるが、恐らくは見た目よりも恐ろしい威力！ これは先にペニスが絶頂してしまうのか?!』

たぶっ♥ ずむんっ♥ ぎゅむうう……♥

「ほ、ほらっ、胸の中で、びくびくしてきた……！」

そろそろ出るんでしょ、出しなさいよ、ほらあっ！」

【っ……そうだね。じゃ、おっぱいから出させてもらおっかな！】

ぎゅりっ♥

「んはうっ?!」

『だがここで乳首に反撃！ 油断したか、ティファも声が漏れた！ 乳首責めが効いている！』

ここで少年も攻撃に出て、ティファの左乳首が狙われる。

パイズリでシワを作ったシャツの上からでもピンポイントで摘まみ上げられ、素早い刺激に驚き混じりの声が出る。

その隙を逃さないとはばかり右の乳首にも指が食い付き、挟みつつ高速で振動して優しく激しく刺激される。

最初の刺激には耐えたティファだが、両乳首への同時刺激が続いて力が抜け……嬌声と共にペニスの脱出を許してしまう。

「ちょっと、離しなさい、ああっ……！」

（まずいわ、仕留めきれなかったなんて……こんなに勃起してるのに何で出さないの？

それに、この指使い……ふ、普通じゃないっ！）

『ハンは終わりだとばかりに責められてしまう！ もうティファの乳首は勃起しているか？ 一気に形勢が逆転していく——！』

【思った以上に感度いいね♪ ほらイツちゃえっ！】

くりっ♥ ぎゅりいいっ♥

「別に、感度……よく、なんかっ！ あっ！ あああっ♥」

『圧倒的ボリュームのパイズリで責めていたが、逆に乳首責めで感じてペニスを逃がした！ これは半イキか?! まだ達してないようだが……』

ぎゅむううっ♥

「ああっ♥ だ、ダメえっ♥」

『後ろを取られた！ 感度の高い胸が驚掴みされて悶える——！』

絶頂を堪えたが、身が竦んでしまい、離れた少年に対処できない。

すぐに後ろに回られ、今度は力強く左右の肉玉が揉み込まれる。

指が埋まるごとに痺れるような快感が走り、これにも耐えられずにまた桃色の悲鳴。

ティファはふるふると震えて否定するが、感度の良さは完全にバレており、獣欲を満たす敏感さに観客席からも嘲笑が飛び交う。

【胸責め得意そうなのに、おっぱい感じすぎじゃない？】

ぎゅちっ♥ ぶるんっ♥ むぎゅううっ♥

「そんなことないわ……あ♥ はあっ♥ くふううっ♥」

（どうしてっ？ こんなに感じたこと、今までなかったのに……っ♥）

もちろん今までに胸が愛撫されたことは何度もある。

だが今までにないほど短時間で胸が昂り、シャツに擦れただけで乳首が勃起しているのが分かってしまうほど。

媚薬でも飲まなければ有り得ないような急激な発情に困惑して碌に反撃できず、脇から顔を出した少年によって今度は乳首が吸い付かれる。

『ティファは防御に必死で反撃できない！ このまま攻撃され続けるのか？』

「んっく……！ 離れ……なさい……っ♥」

ぢゅるっ♥

「あふあああっ♥♥ な、何して……んんううううっ♥♥」

『次は乳吸い攻撃！ シャツの上からでも大ダメージ！ これは絶頂が近いか——？！』

（服の上から、吸ってくるなんて♥ なんなのこの子っ♥ う、上手すぎる……っ♥）

【娼館にいたらしいけど、こういうのは慣れてないみたいだね〜♪ 案外経験浅い？】

「な、舐めないでくれる？ これぐらい、ぜっ♥ 全然っ♥♥」

ぎゅううううっ♥

「あ♥♥ ああああ〜〜〜っ♥♥」

『また乳首が抓られて悶絶！ まだ耐えているが、攻撃が止まらない！』

遂にイッてしまうのか——！』

【案外チョロいなあ……もしかして客の評価いいだけで、

ティファちゃん自身はそうでもなかったり？】

「そんなこと、ない……♥ あなたみたいな子♥ 何人も……あっ♥ んはああっ♥♥」

少年に煽られ、娼館時代の記憶を振り返る。

今までティファはそれなりの男を相手し、全員が満足していった。

だが思い返してみれば、相手の大半は女慣れしていない素人たち。

しかも娼館だけあって事前に準備ができ、興奮剤なども使ってきた。

性戯に関しては少し得意になっていたが……実は思っているほどでもなかった、

少なくとも少年たちのように本格的な淫闘選手と比較すれば、

井の中の蛙であったことに気付かされる。

(ウソ……♥ こいつらにしてみれば♥ 今までののは、大したことなかったっていうの……?♥
そんなのって……)

くりっ♥ ぐちゅうっ♥

「あふあっ♥♥ そ、そこはっ♥♥」

(ダメ これ以上は……力が、入らない……っ♥♥)

『乳首だけでなく手マンでも責められる！

ティファの股間はガクガクと震えている、もう限界か?!』

【ほら、今度こそイッチやえっ♪】

ぐちゅぐちゅっ♥ じゅかじゅかじゅかっ♥♥

「ダメ♥♥ そこ♥♥ そんなに♥♥ 激しく……したらああっ♥♥」

(何でこんなに、感じて……♥♥ お客と全然違いすぎるっ♥♥

く、くる♥♥ そんな♥♥ こんな小さな子に……♥♥)

プシュッ♥♥ プツシヤアッ♥♥

「あ……—————あああああああッ♥♥♥♥」

『ここで絶頂——っ！！ やはり胸でダメージを喰らい過ぎたか、

乳首抓りと手マンの同時攻撃でアクメを迎えてしまった——！

本当に娼館で活躍していたのか、非常に初心な女子といった絶頂を見せてしまう——！』

自分の知る世界など、大したものではなかった……それを痛感しながら、ティファは遂に絶頂へと昇り詰める。

ここまでハッキリとした絶頂感は初めてであり、大きな波に晒されるのにも似た感覚は更に全身を弛緩させる。

プライドが折られ、大勢の前で痴態が晒される恥辱で腰が砕け、ヒザが崩れる。

余韻に震える牝の身体に、無慈悲にも追撃がかけられる。

「あ……♥♥ 私……♥♥ きゃっ♥♥ な、何……してるの……♥♥

もう、終わったんじゃ……♥♥」

【いやいや、まだ限界じゃないでしょ。勝負はコイツを挿れてからだよ！】

「挿れるって……そんな……！ いやああっ♥♥」

絶頂を見せたため終わったと思い込んでいたが、リングのセンサーがそれを許さない。

少年はへたり込んだティファの腰を掴み、スカートをめくりパンツもズラし、秘部に亀頭を宛がう。

淫闘の華である挿入。それを決めようとしており、見栄えのために姿勢も四つん這いバックの体位にされる。

情けなく達する姿を見せた上、更に犯される——絶望感のあまり降参を宣言するが、それも跳ね除けられてしまう。

「待って♥♥ 降参♥♥ 降参するからあ♥♥」

『挿入直前の降参！ これは当然認められない！ 試合の盛り上がり優先で降参も却下される、いよいよ挿入か——！』

【いいじゃん、気持ち良いよ？ 華々しいデビュー戦にしたげるからね♪】

「あ♥♥ ダメ♥♥ いやあっ♥♥」

（こんな大きい♥♥ 挿れられたら——♥♥）

狙いを付けられ、嫌なはずなのに発熱した本能が靡いて力が入らない。
強引に意志力で腰を揺すって逃れようとするが……

「い、いやっ♥♥ いやああっ♥♥」

ぶるんっ♥ ぶるっ♥ びくんっ♥

『ポイントをズラそうと必死に抵抗しているのか、腰を左右させる！
しかし誘っているようにしか見えない！』

意図せずして卑猥に牝肉が揺れ、返ってくるのは嘲笑のみ。

動いてダメならと、今度は胸を寄せて懇願する。が、やはり効果はなく……

「ダメえっ♥♥ それだけは♥♥」

ぶるんっ♥ どぶるうんっ♥

「お願い♥♥ 胸でシてあげるから♥♥ どこでも使っていいから♥♥ そこだけは♥♥」

むっち♥ ぶるるっ♥ たぶうんっ♥

「私の負けでいいから♥♥ 許してええっ♥♥」

【はは、それオネダリしてるのと同じだよ♪ じゃ遠慮なく行くよ……っ！】

がしっ♥ ぬる……っ♥

「いやああああああっ♥♥」

（は、入ってくる♥♥ ダメなのに♥♥ 逃げられな……♥♥）

ずぶうんっ♥

「あっ♥♥♥ あ……♥♥♥ あああああああああっ♥♥♥」

『挿入絶頂——！ ティファ、ここでも期待を裏切らない！
後背位挿入で二度目の絶頂——！』

（なに……これっ♥♥♥ おおき、すぎる♥♥♥ か、身体の中が、おかし……♥♥♥

おかしい、のにい♥♥♥ イッてる♥♥♥ イカされてるっ♥♥♥）

想像を超える存在感に、身体の中が変えられてしまう感覚に襲われる。

実際に子宮が押し上げられており、圧迫感で苦しいはずなのに達するという事態にティファの精神は混乱を極める。

耐え切れないと判断し、もう一度降参を唱えるがやはり簡単には通らず、今度は少年により降参の条件を課される。

「も……♡♡ もう……抜いて♡♡ これ以上は、ムリ……っ♡♡

降参するから♡♡ お願いい……♡♡」

【えー？ ここからなのになあ……。じゃあもっちゃんとした降参宣言してくれないと。

ほら、あんな風は無様な感じにね！】

言われて会場のトある場所を見る。そこには小さなスクリーンがいくつかあり、過去の試合での女性選手の無様な降参宣言シーンがダイジェスト再生されている。

それを真似れば認めると言われるが、卑猥すぎる降参宣言に身が竦む。

「そんなこと♡♡ できるわけ……♡♡」

【言わないと中出しだよ！】

ずんっ♡ ずぱんっ♡ ぱあんっ♡

「あっ♡♡ んおっ♡♡ あ……～～っ♡♡」

『後ろから突き上げられて喘ぐ！ ここからの逆転は絶望的か？

このまま中に出されてしまうのか——？！』

(中出しだけは♡♡ 絶対ダメ♡♡ それだけは……♡♡)

司会に煽られ、もはや後がないのだと認識し直す。

いつ少年の気紛れで出されてしまうか分からない。

恥を忍び、ティファは動画を真似て宣言する。

(嫌がってる、場合じゃない……♡♡ 中に出されないためにも……言わなきゃ……♡♡)

「み……認める♡♡ 私のおっぱいとおまんこ♡♡ ショタちゃんぽに負けたの♡♡」

【ほらっもっと大きな声でっ！】

ぱんっ♡ ぱん♡ ぱちゅんっ♡

「おっ♡♡ おっぱい、もみもみされて♡♡ おまんこ♡♡ かき混ぜられて♡♡

ショタおちんぽに生ハメされてっ♡♡ 我慢できずにイカされたのっ♡♡」

ぱあんっ♡ ぱあんっ♡ ずぱあんっ♡

(激しっ♡♡ でも♡♡ 言わないとおお♡♡)